

わたしの



富士見市の平和のシンボル
「平和の鐘」
市役所前に設置されています

戦時中体験

1941年12月8日は、太平洋戦争が始まった日です。
今の日本があるのは、戦争を語り継ぎ、平和の大切さを伝えてきた多くの方々のご苦労があったからだと思います。終戦から74年、戦争を知る方も少なくなっていますが、これからも若い方に伝えていく必要があると4人の方に体験や思いを寄せていただきました。

台湾での悲しい思い出

土屋 初枝さん（鶴瀬西）



台湾生まれ、台湾育ちの私です。日本の植民地台湾での日本人の生活環境は豊かでした。その中、日中戦争から太平洋戦争と深まっ

ていきました。

昭和16年、戦時中に結婚。一か月後、新任地新竹市に。旅行さえできなかったころです。知人、友人もなく、この地を一生の地と定めた主人は母親に渡台を願い、昭和17年6月母が渡台、8月に長男誕生で四大家族となりました。

18年には高齢者応召、周りの方々も疎開される中、私はあてもなくおりました。上司の方が応召家族は私たちが守りますと。疎開先は登山者利用の山麓の宿でした。トラックに七輪、はんごう、リュックに着替えてまいりました。そして六畳一間の生活に、しゅうとめは一言の愚痴もなく、落ち着くと達者な足でウォーキングです。お金で買えないものを衣類と交換するという生活の中でした。

20年のあの日、ウォーキングから帰るなり、「突然おなか痛いのよ」と多量の出血。その地でお一人のお医者様に来てもらいましたが、もう手遅れです。応急処置の甲斐もなく、もう声も聞くことはなくなりました。私にただ「お母さんご免なさい」「お母さんご免なさい。この様な土地で身内一人の手もふれず…お母さんご免なさい」と泣きました。6月12日は沖繩前方に投爆の日でした。101歳の今も、きのうのことのように思い出します。



昭和16年、台湾での結婚式

勤労奉仕の思い出

萩原 弘さん（鶴瀬西）



私は昭和15年に鶴瀬小学校へ入学しました。鶴瀬村の人口が3300人台でした。小学校は規模が小さく、勝瀬から南は関沢までの児童がすべて通っていました。鶴瀬村には小学校が一つしかなかったのです。静かな農村でしたが年に何度かは小学校の運動会や神社のお祭りなどに多くの人が集まり大変にぎやかになることもありました。

昭和16年12月に第2次世界大戦がはじまりました。このころから急激に村内が変わってきました。召集をうけて出征する人をみんなで送り出すことや、食糧増産の徹底、軍用飛行機の燃料にする「松根油」（松の切り株を乾溜することを得られる油状液体）の原料集めなどに駆り出されたりしました。小学3年ごろからは勉強そっちのけの状況で、竹やりでわら人形を突く訓練をしたり、校庭に防空壕を掘ったり、また兵隊に行っていて働き手のいない農家の手伝いに私たち生徒がかりだされたりしました。



(上) 出征兵士の見送り（鶴瀬駅）
(左) 鶴瀬村青年団の勤労奉仕
いずれも星野幸雄家所蔵
(難波田城資料館提供)

そんなころでした。鶴瀬に陸軍の高射砲陣地が作られることになり、私たち小学生も陣地づくりに勤労奉仕をさせられました。今でも思い出すのは、イモ畑に植えられたばかりのサツマイモの根がふくらみはじめたころのそれを抜いてしまったそんな情景です。でも米軍の爆撃機B29が何回も飛来しましたが高射砲が使われたような記憶はありません。



いつしかこの部隊の地域を「陣地」と呼ぶようになり、今でも「じんち」と呼ぶようですが、正式な地名ではないようです。地図を見ましたが「じんち」はありません。通称なのか俗称なのか、分かりませんが、この名称はあきらかに戦争があったから今でも残っているのです。

新聞配達中に撃たれた

實戸 長生さん（関沢）



昭和16年12月8日、大本営発表「ニイタカヤマノボレ」の暗号が戦隊に届き、ハワイ真珠湾攻撃が行われた。これが戦争のはじまり。

私の生まれた故郷は九州佐伯市、そこに航空隊があった。当時は直川村、人口3000人くらい的小さな村でした。

たしか小学校4年生のとき、アルバイトで新聞配達をしていた。ある時、佐伯市の方から直川に向けてグラマンが10機飛んできた。空がおおわれ、けたましい音もたてて、バリバリと西へ飛び去った。ところがなぜか1機引き返してきた。その時自分はやられたと思い、無意識のうちに近いところにあった電柱にしがみついた。一機が飛び去った後、自分は生きていたことを自覚した。

戦後74年たった今でも真珠湾に沈む戦艦から油がフクフクと浮かんでいる。ハワイに旅したときこの光景を目のあたりにした。

語り継ぐ大切さ

服部 希一さん（鶴瀬西）



小学生のとき、郡山で戦争を体験しましたので、「戦争体験を語る」で、つるせ台小学校の授業に参加させて頂きました。戦争体験を持つ人口は1割になっ

た今、北方四島や竹島を戦争で取り戻せという国会議員が誕生して、あまりの無知に驚きです。授業当日は、言葉だけでなく、視覚にも訴え、戦争の実情を知らせようと、手作りの資料をクラス全員に配布しました。敗戦が決定的になっても、全員が死ぬまで戦えという命令に従う軍国教育の恐ろしさを少しでも伝えることができたろうかと感じました。この戦争は、日本人だけでも30万人の貴い犠牲者（3分の2は食料や医薬品が届かぬための戦病死）を生みました。その反省として戦争は国際紛争の解決手段ではなく、日本は永遠に戦争を放棄するという平和憲法を手にしたのです。

しかし、こうした理不尽な惨禍も教えたり学ばなかったりしたら「戦争も言論の自由」と叫ぶ人を生む結果になります。戦争を知る人、学んだ人が、粘り強く語り継ぐ大切さを今更ながら痛感しています。富士見市の平和・憲法啓発事業の益々の発展を願ってやみません。